

# 日本人の死後観

## — その類型と性差・年代差の検討

白岩 祐子、堀江 宗正

### 目的

本研究は、これまでさまざまな形で測定されてきた日本人の死後観の質問項目を収集し補足したうえで一連の項目群を作成し、オンライン調査によって死後観の類型とそこでの性差・年代差を明らかにする。

### 先行研究(実証)

日本人の死後観を把握する試みはすでに一定数行われている。その件数は、単一項目で死後世界の有無などを尋ねた調査まで含めると20を越す。これらの調査は概ね、臓器移植や安楽死など隣接テーマと並行して死後観を尋ねる世論・社会調査(e.g., 朝日新聞, 2010: 大阪商業大学JGSS研究センター, 2008: 統計数理研究所, 1958, 2008, 2013: 山本・堀江, 2016)と、死後観に特化した学術的検討(e.g., 平井・坂口・安部・森川・柏木, 2000: 金児, 1993, 1994, 1997: 河野, 2006: 日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団, 2018: 渡部・金児, 2004: 杉山, 1993: 丹下, 1999)とに分けられる。

前者は大規模調査を通じてひろく一般多数の人々にアプローチしている反面、質問項目が単一あるいは少数にとどまるため、人々が抱いている死後観の全貌を把握する目的には適していない。後者は心理尺度開発の一環として、尺度を構成する因子のひとつに特定の死後観を盛り込んだものである。した

がって質問項目のバリエーションは前者を上回るが、対象者は大学生や看護師など特定の層に限定される傾向があることから、結果をそのまま一般化することは難しい。

具体的な質問項目をみていくと、これらの調査からは「魂・霊魂」「祟り」「先祖」「先祖による見守り」「極楽・天国」「あの世」「死後の世界」「地獄」「生まれかわり」「前世・来世」や「自然（生命、宇宙）への還元」といったキーワードを抽出することができる（表1の右から2行目）。

表1 死後観の分類

岸本（1973）の分類		分類（案）	特徴・キーワード	
			先行研究（実証）	先行研究（論考）
① 肉体的生命の永続				エジプトのミイラ技術、キリスト教などの復活思想、不老不死の仙人
② 死後の生命の永続	(1) 霊魂	魂・霊魂の存在	魂、霊魂	
		魂・霊魂の力	祟り	非業の死、怨霊、未浄化な霊、自縛霊
			加護、見守り	恩寵としての霊魂、守護霊、この世での安らかな眠り、
	ご先祖様	先祖	訪問・交流、国家や家の守護、規律	
		(2) 理想世界 未来国	褒賞としての他界	極楽、天国
	懲罰としての他界		あの世、死後の世界	六道、霊界、因果応報
地獄			煉獄	
(3) 輪廻	生まれかわり	生まれかわり、前世・来世	復活	
③ 限りなき生命への委託		大きな存在への統合	自然・生命・宇宙への還元	子孫への継承、歴史、産土神・氏神への一体化、類魂、遺伝子情報
		生者の記憶		生者の記憶、仕事・遺品
④ 現実生活での永遠の生命の感得				没我の境地、涅槃、神秘的合一

### 先行研究（論考）

一方、宗教学や民俗学など隣接領域に目を向けると、前掲の実証研究が必ずしも扱っていない死後観、あるいは重要な特徴が言及されていることに気づく（表1の最右行）。たとえば、霊魂はただ意味もなく祟るのではなく、非業の死を遂げた死者の怨霊や未浄化の霊こそが生者や社会を祟るというイメージを私たちは抱いている（五来, 1994：川村, 2015：佐藤, 2008）。また霊魂はそうしたネガティブな力だけでなくポジティブな力をもっており、生者を支える霊魂の存在が指摘されている（五来, 1994：鎌田, 2017：川村, 2015）。これらの霊魂はあの世ではなくこの世で安らかな眠りにつき、時折生者と交流する（鎌田, 2017：佐藤, 2008）。このような霊魂観は柳田（1980）の先祖観とも通底するものだろう。すなわち、死者はこの国土にとどまって子孫末裔を見守り、盆や正月には生者を訪れ、やがて個身を失ってひとつの霊体に融け込み家や国家を守護する存在となる。したがって子孫は常に見守られているものとしてその言動を律しなければならない、という死後観である。

川村（2015）は東北地方にみられる冥婚——未婚で亡くなった男性（女性）と対の花嫁（花婿）人形や絵馬を寺院に奉納する風習——を取り上げて、霊魂は死後も成長し、結婚して子どもを産み育て、やがて年老いていくという死後観を象徴するものと指摘する。こうした慣習は現世の延長としての他界観を示唆するものであるが、同様に、「現世の総決算」というべき他界イメージも存在する。つまり、現世での善行には良き結果が、悪行には悪しき結果が伴うという因果応報の思想であり（五来, 1994：加地, 2017：川村, 2015：立川, 2017）、この因果律にもとづくと、報いとして前者には極楽往生や天国での永生が、後者には地獄行きが約束されることになる。

さらに、以上のどちらかといえば旧式の死後観に対して佐藤（2008）は、生者の記憶や縁の品々のなかのみ死者は存在するという死後観を挙げ、これが現代の主流であると論じている。

### 分類(案)と本稿の検討範囲

これらの実証的、あるいは論考的な検討で挙げられた死後観を分類した結果を表1(左から2行目)に示す。ここでは実証研究のキーワードを極力残す形で分類した。すなわち、「魂・靈魂の存在」「魂・靈魂の力」「ご先祖様」「褒賞／懲罰としての他界」「生まれかわり」「大きな存在への統合」「生者の記憶」の8類型である。

以上の分類はさらに、岸本(1973)が挙げた生死観4分類の枠内におさめることができる(表1の最左行)。岸本は、不滅無限の生命を信じる方法として、①肉体的生命の存続を希求する、②死後における生命の存続を信じる、③自己の生命を、それにかわる無限の生命に託する、④現実生活のなかに永遠の生命を感得する、の4点を挙げている。①ではエジプトのミイラ保存や、キリスト教・イスラム教などにみられる義人の復活思想が、③では故人が残した子どもや仕事、④では没我の境地が各例として挙げられている。②はさらに、(1)肉体を離れた靈魂(人魂の目撃、灯籠流しなど盆行事がそのあらわれ)、(2)理想世界、未来国(天国、地獄が典型例)、(3)輪廻(同一の生命が異なる肉体をもって繰り返して地上の生活を営む)の3つに区分される。この4分類中①②と③はそれぞれ、存在脅威管理理論における直接的不死と象徴的不死というふたつの不死概念(Solomon, Greenberg, & Pyszczynski, 1991: 脇本, 2005)に相当する。

前掲の4分類中、本研究では日本人に馴染みぶかい死後観として実証研究が検討してきた②死後の生命の永続と③限りなき生命への委託に着目する。これらの類型に関連して先行研究が実証的・論考的に取り上げてきた内容を網羅した質問項目群を作成し、オンライン調査を通じてひろく一般の人々の回答を求め、死後観を因子分析によって類型化する。そのうえで、性・年代差を考慮しながら各類型の特徴を明らかにしたい。

## 方法

### 手続きと回答者

2019年2月、民間調査会社（株式会社マクロミル）のパネルに対し、同社を通じて調査協力を依頼した。合計1,200人を目標サンプル数とし、総務省統計局「日本の統計 第2章人口・世帯 都道府県別人口と人口増減率（2016年8月付）」が示す都道府県ごとの性別比率と、調査会社が保持している各年代の人口統計比にしたがってサンプル数を割りあて、これに沿って回収した。最終的に1,279人（男性614人 [48%]、平均年齢51.06歳、 $SD=15.70$ ）から回答を得た。年代と性別の内訳は、20代158人（全体中12.4%、うち男性80人 [50.6%]）、30代193人（同15.1%、うち男性98人 [50.8%]）、40代226人（同17.7%、うち男性113人 [50.0%]）、50代193人（同15.1%、うち男性96人 [49.7%]）、60代374人（同29.2%、うち男性165人 [44.1%]）、70代以上135人（同10.6%、うち男性62人 [45.9%]）であった。

### 質問項目

表1に挙げた「魂・靈魂の存在」「魂・靈魂の力」「ご先祖様」「褒賞／懲罰としての他界」「生まれかわり」「大きな存在への統合」そして「生者の記憶」にそれぞれ相当する質問項目を、先行研究を参考にしながら新たに作成した。具体的には、「以下の考えについてあなたはどのように思いますか」というリード文に続けて、表2に挙げた52項目を5件法（1：まったくそう思わない、3：どちらともいえない、5：とてもそう思う）で尋ねた。

## 結果

### 死後観の因子構造

52 項目の因子分析（最尤法・プロマックス回転）を計 2 回行った。1 回目の因子分析では、初期解における固有値の減衰状況（第 7 因子から第 10 因子まで、1.23、1.11、1.02、0.90）から 9 因子を採択した。因子負荷量が .40 以上であり、なおかつ他の因子の負荷量が .30 未満という基準値にもとづき、「魂は人が生きている間も存在しないと思う（逆転）」「故人は遺族が清く正しく生きていくことを願っていると思う」「遺族が供養することで死者はあの世に行けるのだと思う」「故人の魂や霊魂はこの世にとどまり続けるだろう」の合計 4 項目を除外した。そのうえで 2 回目の因子分析を行い、1 回目の結果と解釈のしやすさにもとづいて 9 因子 48 項目を採択した（表 2）。

第 1 因子は、「善人はあの世や死後の世界に行き、そこで幸せに暮らすことができる」など、善行に対する報いとしての良き他界イメージをあらわす 8 項目 ( $\alpha = .96$ ) から成り、これを「褒賞としての他界」と名づけた。第 2 因子は、「故人は遠い他界に旅立つのではなく、この世のどこかで安らかな眠りにつく」など、死者は断絶した他界ではなく遺族の近くで安らぐという死後観 9 項目 ( $\alpha = .93$ ) から成っており、これらを「ポジティブな共生」と名づけた。第 3 因子は、「不幸な最期、非業の死を迎えた死者の魂や霊魂は、この世をさ迷うことがある」など、現世での悲運ゆえに死者が現世にとどまり、ときに災いをもたらすという 6 項目 ( $\alpha = .92$ ) から構成され、これを「ネガティブな共生」とした。第 4 因子は、「人の肉体が減びてもその魂や霊魂は残る」など、死後も魂や霊魂は残るという死後観 5 項目 ( $\alpha = .87$ ) から構成され、これを「魂・霊魂」とした。第 5 因子は、「人は死んでも別の肉体をもって再生する」などの 6 項目 ( $\alpha = .92$ ) から成り、これを「生まれかわり」と名づけた。第 6 因子は、「非道な行いをした人は、亡くなったあと地獄に墮ちる」など、悪行に対する報いとしての悪しき他界イメージを

表2 死後観の因子分析の結果（最尤法・プロマックス回転、2回目）

項目	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	F8	F9
<b>F1 褒賞としての他界 (<math>\alpha = .96</math>)</b>									
Q39S2 善人はあの世や死後の世界に行き、そこで幸せに暮らすことができる	.94	-.06	-.00	.08	-.02	.01	-.02	-.01	.01
Q39S1 故人はあの世・死後の世界（天国・極楽・浄土など）にいるだろう	.89	-.07	.02	.10	-.04	-.01	-.04	-.00	.07
Q39S5 生前に善いことをした人は天国・極楽・浄土に行ける	.89	-.03	.03	.02	-.04	.08	.00	-.04	.00
Q39S3 故人は安らぎに満ちた平穏な場所において、残された人もいつかそこで再会することができる	.89	.03	-.00	.07	-.02	-.03	-.01	.07	-.04
Q39S6 故人は満ち足りた場所で自分の好きなことを楽しんでいるだろう	.88	.01	-.05	-.02	.04	.01	.08	-.01	-.06
Q39S4 生前には叶わなかった故人の願いも、あの世でならば叶えられる	.88	.04	-.04	.00	.03	-.05	.06	-.04	-.05
Q39S7 幼くして亡くなった死者はあの世で年齢を重ね成長していくだろう	.67	.06	.04	-.01	.01	.05	.10	-.06	-.08
Q39S8 死者が無事あの世に辿りつけるよう、遺族は供養する必要がある	.44	.27	.14	-.13	.03	.01	-.05	.01	.15
<b>F2 ポジティブな共生 (<math>\alpha = .93</math>)</b>									
Q36S3 故人は墓地で眠っていて、そこに行けばいつでも会うことができる	-.11	<b>1.05</b>	-.12	-.08	-.04	.01	.03	-.12	-.05
Q36S5 故人は仏壇において、遺族はいつでも会うことができる	.01	<b>.94</b>	-.08	-.02	-.01	-.07	.00	-.10	.01
Q36S4 故人はお盆には帰ってきて遺族と再会する	.06	<b>.74</b>	.09	.04	.03	-.05	-.04	-.04	.00
Q36S2 故人は遠い他界に旅立つのではなく、この世のどこかで安らかな眠りにつく	-.04	<b>.65</b>	-.03	.00	.01	-.03	.14	-.01	-.02
Q36S9 故人は遺族の言葉を聞き、遺族のふるまいを見つめている	.12	<b>.62</b>	.04	.12	-.02	.07	-.08	.07	-.04
Q36S6 遺族が供養することで死者は平穏を得ることができる	.09	<b>.62</b>	.11	-.02	-.03	-.04	.02	.02	.11
Q36S7 故人は愛する人のそばにいて見守り、その幸福を願っている	.22	<b>.60</b>	-.02	.09	-.04	-.02	-.03	.12	-.05
Q36S8 故人が生前大切にしていたものを遺族が粗末にしたら悲しむだろう	-.02	<b>.56</b>	.11	-.03	-.05	.05	-.07	.23	.01
Q36S11 故人は必要になれば遺族を庇護し力を貸してくれる	.23	<b>.44</b>	.05	.16	-.01	.04	-.06	.10	-.07

**F3 ネガティブな共生 ( $\alpha = .92$ )**

Q3755	不幸な最期、非業の死を迎えた死者の魂や靈魂は、この世をさ迷うことがある	.06	-.14	<b>.96</b>	.05	-.03	-.06	-.04	.02	.02
Q3756	心残りがあると死者はあの世に行くことができないと思う	.06	-.14	<b>.91</b>	.01	.03	.01	-.00	-.00	-.02
Q3757	この世に恨みをもつ死者は、個人や社会に災い(ばちや祟り)をもたらすことがある	-.10	.04	<b>.88</b>	-.01	.01	.09	-.01	-.05	-.09
Q3754	不慮の死、若すぎる死を迎えた死者は、この世に強い気持ちを残すだろう	.06	-.01	<b>.83</b>	-.11	-.02	-.05	-.00	.09	.05
Q3751	亡くなった直後の死者の魂や靈魂はこの世をさ迷いやすい	-.05	.08	<b>.64</b>	.16	.04	-.03	.04	-.05	-.04
Q3753	遺族が供養しないと死者は災い(ばちや祟り)をもたらすことがある	-.07	.29	<b>.55</b>	-.11	.01	.09	-.03	-.07	.08

**F4 魂・靈魂 ( $\alpha = .87$ )**

Q35S2	人の肉体が滅びてもその魂や靈魂は残る	.02	.08	.03	<b>.83</b>	-.01	.05	.00	-.01	-.01
Q35S1	ふつう目には見えないが、故人の魂や靈魂は存在すると思う	-.01	.08	.08	<b>.81</b>	.01	.06	-.05	.05	-.03
Q34S1	死後も人の意識は存在する	-.06	.03	.00	<b>.72</b>	.10	-.00	.07	-.01	.05
Q34S2	死後も意識は残ると思う	-.04	.04	.04	<b>.70</b>	.09	-.02	.08	-.06	.04
Q35S3	魂は人が生きている間は存在するが、死ぬと消えてしまうと思う(逆転)	-.21	.19	.10	-. <b>.47</b>	.01	-.01	.21	.06	.01

**F5 生れかわり ( $\alpha = .92$ )**

Q41S2	人は死んでも別の肉体をもって再生する	-.09	-.11	.00	.20	<b>.90</b>	-.05	.01	.03	-.02
Q41S1	人はいつかまた生まれ変わることができる	-.01	-.14	-.03	.18	<b>.88</b>	-.06	-.07	.09	.05
Q41S4	善人は生まれ変わったのち、よりよい人生を送ることができる	.19	.16	.01	-.10	<b>.69</b>	.02	-.02	-.01	-.03
Q41S5	悪人は生まれ変わったのち、より悲惨な人生を送ることになる	.03	.14	.12	-.19	<b>.65</b>	.14	.03	-.09	-.07
Q41S6	死とは新しい人生の出発点である	.11	-.01	-.02	.08	<b>.62</b>	.02	.03	-.03	-.00
Q41S3	遺族が供養することで死者は幸せな来世を得ることができる	.24	.27	.00	-.10	<b>.40</b>	.04	-.01	.03	.07

**F6 懲罰としての他界 ( $\alpha = .94$ )**

Q40S2	非道な行いをした人は、亡くなったあと地獄に墮ちる	-.01	-.03	-.02	.06	-.03	<b>1.00</b>	.00	-.01	-.01
Q40S1	私利私欲のために他者を傷つけた人は死後、地獄に行くだろう	.00	-.05	-.00	.03	-.01	<b>.93</b>	-.02	.03	.04
Q40S3	人は現世の罪に応じてあの世で罰を受けるものだ	.07	-.01	.05	-.00	-.00	<b>.82</b>	.01	-.00	.02
Q40S4	因果応報というのはあの世(天国・極楽・浄土ないし地獄)で完結するものだ	.19	.02	.05	-.05	.07	<b>.54</b>	.03	.01	.00

F7 大きな存在への統合 ( $\alpha = .82$ )										
Q33S3	死後、人は自然や宇宙のなかに 融け込み一体化する	.04	-.01	.02	-.05	-.04	.01	<b>.89</b>	-.05	-.02
Q33S1	人は死ぬと生まれた大地や自然 のなかに還っていくと思う	.02	.05	-.10	-.08	.03	-.01	<b>.71</b>	.07	.00
Q33S2	人は死ぬと大きな歴史のなかに 吸収されていく	.04	-.01	-.02	-.11	-.02	.01	<b>.68</b>	.11	.04
Q34S3	死者の魂は一定期間は個性ある 意識を保つが、やがて大地・自 然・宇宙・神などと一体になる	.07	-.01	.16	.21	.01	-.02	<b>.55</b>	-.05	.03
F8 生者の記憶 ( $\alpha = .81$ )										
Q32S1	故人は残された人の心や記憶の なかで生き続ける	.06	-.15	-.02	-.01	.00	-.01	.00	<b>.90</b>	-.01
Q32S2	故人はその仕事・作品や関わっ た人々・遺族のなかで生き続け る	-.09	-.08	-.00	-.04	.05	.02	.06	<b>.88</b>	.00
Q32S3	故人は遺品・形見や写真（遺影） の中に息づいている	-.04	.28	-.00	-.06	-.03	.01	.06	<b>.55</b>	-.02
F9 ご先祖様 ( $\alpha = .89$ )										
Q38S2	故人はきちんと供養されること でご先祖様の一員になっていく	-.04	.03	-.01	-.01	.01	.02	-.04	.01	<b>.97</b>
Q38S1	遺族が一定期間（三十三回忌な ど）供養すると故人は「ご先祖 様」になる	-.05	.01	-.02	.03	-.04	.02	.07	-.01	<b>.85</b>
Q38S3	ご先祖様となった故人は末永く 家や国を守護してくれる	.23	.20	.01	.03	.02	-.01	-.01	-.01	<b>.46</b>

※ 1 回目の因子分析において負荷量が 0.4 未満となった「魂は人が生きている間も存在しないと思う（逆転）(Q35S4)」「故人は遺族が清く正しく生きていくことを願っていると思う（Q36S10)」「遺族が供養することで死者はあの世に行けるのだと思う（Q37S2）」の 3 項目と、複数の因子にまたがって負荷量が 0.4 以上となった「故人の魂や霊魂はこの世にとどまり続けるだろう（Q36S1）」を除外して 2 回目の因子分析を行った。

あらかず 4 項目 ( $\alpha = .94$ ) を含んでおり、これを「懲罰としての他界」と名づけた。第 7 因子は、「死後、人は自然や宇宙のなかに融け込み一体化する」など、自然・宇宙・大地・歴史・神といった大いなる存在に吸収・統合されていく死後観をあらかず 4 項目 ( $\alpha = .82$ ) から構成され、これを「大きな存在への統合」とした。第 8 因子は、「故人は残された人の心や記憶のなかで生き続ける」など、生前関わった人々や功績のなかに死者は生きるという 3 項目 ( $\alpha = .81$ ) を含んでおり、これを「生者の記憶」とした。最後の第 9 因子は、「故人はきちんと供養されることでご先祖様の一員になっていく」などの 3 項目 ( $\alpha = .89$ ) から成っており、これを「ご先祖様」と名づけた。

## 各因子の基本統計量・相関係数・クラスター分析

各因子の評定平均値（標準偏差）と相関係数を算出した（表 3）。平均値は概ね中点前後におさまったが、このうちもっとも高い値が「生者の記憶」（ $M=3.80, SD=0.84$ ）、もっとも低い値が「ネガティブな共生」（ $M=2.73, SD=0.90$ ）であった。

表 3 因子毎の評定平均値・標準偏差および相関係数

	M	SD	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	F8	F9
F1 褒賞としての他界	3.02	0.98	—								
F2 ポジティブな共生	2.99	0.86	.79***	—							
F3 ネガティブな共生	2.73	0.90	.67***	.70***	—						
F4 魂・靈魂	2.88	0.94	.63***	.59***	.64***	—					
F5 生まれかわり	2.84	0.94	.76***	.68***	.68***	.67***	—				
F6 懲罰としての他界	2.96	1.00	.72***	.63***	.69***	.51***	.66***	—			
F7 大きな存在への統合	3.00	0.88	.42***	.43***	.31***	.38***	.38***	.31***	—		
F8 生者の記憶	3.80	0.84	.37***	.47***	.27***	.26***	.30***	.26***	.33***	—	
F9 ご先祖様	3.06	0.95	.68***	.72***	.61***	.47***	.59***	.60***	.37***	.36***	—

※ 5 件法による。\*\*\* $p<.001$

因子間相関は総じて強い正の値を示した。たとえば、「褒賞としての他界」を肯定する人は同様に、「ポジティブな共生（ $r=.79, p<.001$ ）」「ネガティブな共生（ $r=.67, p<.001$ ）」「魂・靈魂（ $r=.63, p<.001$ ）」「生まれかわり（ $r=.76, p<.001$ ）」「懲罰としての他界（ $r=.72, p<.001$ ）」「ご先祖様（ $r=.68, p<.001$ ）」を肯定する傾向にある。ただし、「大きな存在への統合」と「生者の記憶」の他 7 因子との相関係数は比較的弱いものであった（ $r_s=.31 \sim .43, p_s<.001$ ； $r_s=.26 \sim .47, p_s<.001$ ）。

因子間の関係性をさらに明らかにするため、各平均値を対象とする階層クラスター分析（平方ユークリッド距離、Ward 法）を行った（図 1）。その結果、「褒賞としての他界」「ポジティブな共生」「ご先祖様」が同一のクラス

ターに、また「ネガティブな共生」「生まれかわり」「懲罰としての他界」が別のクラスターに集約された。両クラスターを「魂・霊魂」、さらに「大きな存在への統合」が包括する一方で、「生者の記憶」は上記とは異なる単独のクラスターであることが確認された。

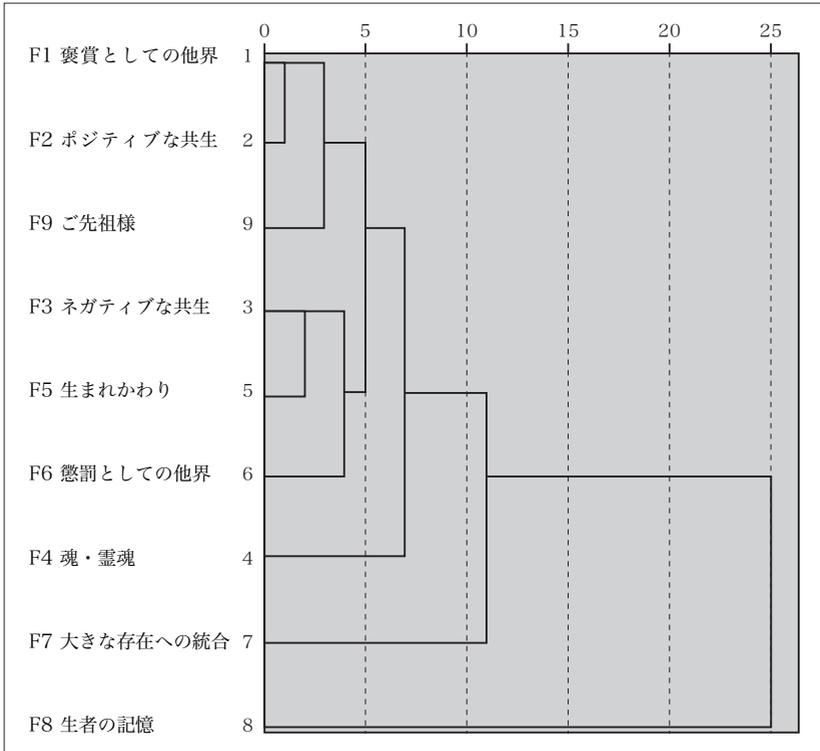


図1 因子毎の評定平均値に対するクラスター分析

### 性差・年代差

各平均値を従属変数、性別と年代を独立変数とする2要因分散分析を行った(表4)。

表4 性別・年代毎の平均値（上段）・標準偏差（下段）

	性別	20代	30代	40代	50代	60代	70代 以上	総合	分散分析の結果
褒賞としての 他界	男性	2.84 1.03	2.84 0.99	2.91 0.93	2.92 1.03	2.70 1.02	2.57 1.10	2.80 1.01	性差 ***
	女性	3.37 0.80	3.28 0.95	3.27 0.96	3.25 0.92	3.17 0.89	3.07 0.91	3.23 0.91	
ポジティブな 共生	男性	2.81 0.95	2.79 0.92	2.95 0.81	2.85 0.95	2.79 0.90	2.67 0.92	2.82 0.90	性差 ***
	女性	3.33 0.70	3.27 0.81	3.20 0.76	3.20 0.77	3.03 0.80	3.05 0.86	3.16 0.79	
ご先祖様	男性	2.99 0.95	2.81 1.05	2.88 0.88	2.83 1.06	2.92 1.06	2.87 1.07	2.89 1.01	性差 ***
	女性	3.25 0.76	3.27 0.87	3.24 0.91	3.26 0.86	3.20 0.87	3.15 0.81	3.23 0.86	
ネガティブな 共生	男性	2.70 0.90	2.63 0.95	2.70 0.84	2.50 0.95	2.44 0.88	2.29 0.97	2.55 0.91	性差・年代差 *** 20代 > 60代 **, 70代以上 *** 30代 > 70代以上 * 40代 > 60代 *, 70代以上 **
	女性	3.17 0.73	2.98 0.92	3.01 0.80	2.93 0.83	2.79 0.85	2.65 0.84	2.90 0.85	
生まれかわり	男性	2.89 1.02	2.77 1.00	2.83 0.89	2.62 1.02	2.57 0.92	2.23 0.97	2.66 0.98	性差・年代差 *** 20代 > 50代 †, 60代・70代以上 *** 30代 > 60代 *, 70代以上 ** 40代 > 60代 *, 70代以上 **
	女性	3.32 0.66	3.14 0.84	3.08 0.94	3.02 0.78	2.85 0.91	2.85 0.85	3.01 0.87	
懲罰としての 他界	男性	2.92 0.99	2.89 1.06	2.90 1.03	2.80 0.97	2.77 1.07	2.71 1.22	2.83 1.05	性差 ***
	女性	3.27 0.86	3.24 1.10	3.10 0.95	3.17 0.89	2.94 0.93	2.96 0.87	3.08 0.94	
魂・靈魂	男性	2.92 0.96	2.81 0.93	2.90 0.90	2.70 0.96	2.56 0.98	2.48 0.89	2.72 0.95	性差・年代差 *** 20代 > 60代・70代以上 ** 40代 > 60代 †, 70代以上 *
	女性	3.22 0.86	3.10 0.97	3.07 0.86	3.08 0.92	2.94 0.92	2.88 0.89	3.03 0.91	
大きな存在 への統合	男性	2.58 0.84	2.68 0.89	2.79 0.84	2.93 0.92	3.07 0.88	3.19 0.92	2.88 0.90	性差・年代差 *** 20代 < 50代 *, 60代・70代以上 *** 30代 < 50代 *, 60代・70代以上 *** 40代 < 60代 **, 70代以上 *** 50代 < 70代以上 †
	女性	2.95 0.80	2.78 0.83	2.97 0.92	3.15 0.73	3.25 0.81	3.41 0.81	3.10 0.84	
生者の記憶	男性	3.48 1.09	3.45 0.94	3.66 0.86	3.73 0.86	3.68 0.80	3.61 0.80	3.62 0.89	性差 ***, 交互作用 ** 女性 > 男性: 20代・30代 ***, 40代 **, 50代・60代・70代以上 * 女性: 30代 > 60代 *
	女性	3.98 0.76	4.23 0.76	3.94 0.68	4.02 0.73	3.89 0.78	3.90 0.74	3.98 0.75	

※ 5 件法による。\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , † $p < .10$

「褒賞としての他界」では性別の主効果が有意となり、男性より女性の値が高くなっていた ( $F(1, 1267) = 59.62, p < .001$ )。年代の主効果も有意であったが ( $F(5, 1267) = 2.42, p < .05$ )、多重比較 (Tukey HSD による。以下同じ) の結果、年代間に有意差は確認されなかった。交互作用は有意でなかった ( $F(5, 1267) = 0.32, n.s.$ )。「ポジティブな共生」でも女性の値が有意に高くなった ( $F(1, 1267) = 55.36, p < .001$ )。年代の主効果も有意傾向であったが ( $F(5, 1267) = 2.22, p = .05$ )、多重比較の結果、年代間に有意差は確認されなかった。交互作用も有意でなかった ( $F(5, 1267) = 1.00, n.s.$ )。「ご先祖様」でも女性の値が有意に高くなった ( $F(1, 1267) = 38.80, p < .001$ )。年代の主効果 ( $F(5, 1267) = 0.25, n.s.$ )、交互作用 ( $F(5, 1267) = 0.42, n.s.$ ) は有意でなかった。

「ネガティブな共生」でも女性が有意に高い値を示し ( $F(1, 1267) = 53.56, p < .001$ )、年代の主効果も有意であったため ( $F(5, 1267) = 6.69, p < .001$ ) 多重比較を行ったところ、20代と40代は60代 ( $p < .01, p < .05$ )、70代以上 ( $p < .001, p < .01$ ) より有意に高く、また30代は70代以上 ( $p < .05$ ) より高いことが確認された。交互作用は有意でなかった ( $F(5, 1267) = 0.22, n.s.$ )。「生まれかわり」においても女性の値が有意に高く ( $F(1, 1267) = 53.82, p < .001$ )、年代の主効果も有意であった ( $F(5, 1267) = 8.54, p < .001$ )。多重比較の結果、20代 ( $p < .001$ )、30代 ( $p < .05, p < .01$ )、40代 ( $p < .05, p < .01$ ) と60代・70代以上との間に、また20代と50代 ( $p = .05$ ) の間にそれぞれ有意差が確認された。交互作用は有意でなかった ( $F(5, 1267) = 0.90, n.s.$ )。「懲罰としての他界」でも、女性が男性より有意に高く ( $F(1, 1267) = 23.26, p < .001$ )、また年代の主効果も有意であったが ( $F(5, 1267) = 2.33, p < .05$ ) 多重比較の結果、年代間に有意差はみられなかった。交互作用も有意でなかった ( $F(5, 1267) = 0.48, n.s.$ )。

「魂・靈魂」でも女性が有意に高い値を示し ( $F(1, 1267) = 34.24, p < .001$ )、また年代の主効果も有意であった ( $F(5, 1267) = 4.91, p < .001$ )。ここでは20代と40代が60代 ( $p < .01, p = .06$ )、70代以上 ( $p < .01, p < .05$ ) より高い値を示していた。交互作用は有意でなかった ( $F(5, 1279) = 0.46, n.s.$ )。

「大きな存在への統合」でも女性は有意に高い値を示した ( $F(1, 1267) =$

17.84,  $p < .001$ )。年代差も有意であり ( $F(5, 1267) = 13.33, p < .001$ )、多重比較の結果、これまでとは逆に高年層ほど高い値を示し、60代・70代以上は20代 ( $p < .001$ )、30代 ( $p < .001$ ) および40代 ( $p < .01, p < .001$ ) より高い値を、また50代も20代・30代 ( $p < .05, p < .01$ ) より高い値を示すことが確認された。70代以上はさらに50代より高い値を示した ( $p = .05$ )。交互作用は有意でなかった ( $F(5, 1267) = 0.48, n.s.$ )。

「生者の記憶」でも女性の値が高くなっていたが ( $F(1, 1267) = 65.83, p < .001$ )、年代差はみられなかった ( $F(5, 1267) = 0.72, n.s.$ )。交互作用が有意 ( $F(5, 1267) = 3.63, p < .01$ ) であったため単純主効果検定を行ったところ、すべての年代において女性の値は男性より有意に高いこと ( $F(1, 1267) = 4.42 \sim 43.49, p < .05 \sim .001$ )、および女性のなかでも30代の値が60代より高いことが確認された ( $F(5, 1267) = 2.51, p < .05$ )

## 考察：死後観の類型

当初想定していた類型に概ね近い因子構造が確認された。以下、各クラスター・因子とそれぞれの特徴(表5)を検討する。

### 二人称の死

第一のクラスターは「褒賞としての他界」「ポジティブな共生」「ご先祖様」から構成される。「褒賞としての他界」は仏教やキリスト教などで描かれてきた天国・極楽浄土に相当する。これは、死後の行き先は生前の行いによって決まるという因果応報思想に導かれた、善行者のみが辿りつくことのできる場所である。死別した親しい人もここに安らいでおり、自分もいつかこの地で故人と再会できるはずだという死後観は、社会にひろくみいだされる他界観の一類型といえるだろう。この因子にはさらに、死後も人は成長するという「現世の延長」的他界観が含まれた。天国・極楽という場所は、思いを遂げないうちに早世した若者が念願を成就し、成長を待たずに亡くなった幼児・子どもが成熟する場としても機能しているものと考えられる。

「ポジティブな共生」は、当初想定していた「魂・靈魂の力」のうち見守り・加護といったポジティブなイメージに該当する。この因子の特徴は、死者はあの世、天国・極楽のような断絶した遠い他界ではなく、この世のどこかに眠っていると想定するところにある。その場所は「墓地」「仏壇」「この世のどこか」「愛する人のそば」と多岐にわたり、死者の居場所の捉えどころのなさ、その遍在性を示唆するものとなっている。実際、生者による死者との対話はあらゆる場所で——墓地や仏壇、あるいは単に心のなかに死者を思い浮かべることで——行われる。これらの場所は、生者が死者と交流するための媒介物、つまり両者が出会う「窓」や「チャンネル」のようなものといえるかもしれない。生者がその窓を開いたりチャンネルを合わせさえすれば再び死者と相見ることができると想定する点で、本因子は隔絶した「褒賞としての他界」とは空間的イメージの異なる死後観とっていいだろう。このように矛盾するふたつの因子が同一クラスターに集約されたことは、現代日本人の死後観がきわめて大らかで、異なる観念を並存させる複雑な構築物であることを示唆している。鎌田（2017）はあの世とこの世を二元論ではなく一元論的に捉えるのが日本人の他界観の特徴だと述べているが、本結果はむしろ二元論と一元論とが日本人のなかに同居していることを示している。

「ご先祖様」は、家や国家の守り神としての先祖観（柳田、1980）を象徴している。ただし、柳田が語った先祖信仰の特徴は上記「ポジティブな共生」の各項目にもみてとることができる。たとえば「故人はお盆には帰ってきて遺族と再会する」という項目は先祖信仰の特徴として柳田が挙げた内容そのものである。「ご先祖様」という用語ゆえに本因子は「ポジティブな共生」から独立して構成されたものの、両者はもともと似通った死後観であることから同一クラスターに集約されたものと考えられる。

本クラスターは、死者の幸福を願い、死者との再会や共生を願い、死者による庇護を願う人々の信仰をあらわしたものである。それは、死者一般というよりは死別した大切な故人へのまなざしに近い。よって、本クラスターを死の人称という概念（Jankélévitch, 1966 中澤訳 2017）に照らせば、自己（一

人称)の死、大切な人(二人称)の死、無関係な第三者(三人称)の死のうち、二人称の死をめぐる死後観ということになるだろう。小此木(2017)は、天国・極楽などの死後観が、死別した相手への思慕の情と、故人を再生させたいという願望のあらわれだと述べているが、本結果はこうした指摘とも整合的である。

### 三人称の死

第二のクラスターは「ネガティブな共生」「生まれかわり」「懲罰としての他界」から構成される。このうち「ネガティブな共生」は、当初想定していた「魂・靈魂の力」のうち、災いをもたらす、さ迷うといったネガティブなイメージの集約となった。そうしたイメージを付与される主体は非業の死者、未浄化の靈魂である。供養の必要性に言及する項目は複数の因子にまたがっているが、本因子には供養をしないと死者が災いをもたらすという項目が含まれることとなった。この点をふまえれば、「非業の死者」には、不遇の人生を送り無念のうちに亡くなった人や不幸な亡くなり方をした人だけでなく、死後遺族から供養されない死者の存在も含意されている可能性がある。

「生まれかわり」は、人は別の肉体をもって再生するという信仰から構成されている。輪廻転生の思想が転じてひろく流布した死後観の一類型とみなすことができるだろう。「褒賞／懲罰としての他界」と同じく、本因子にも因果応報の影響をみてとることができる。生前の行いによって死後の処遇が定まるという応報思想は、死後に赴く他界のみならず、生まれかわった先の生にまで及んでいるといえるだろう。

「懲罰としての他界」は、仏教やキリスト教などで描かれてきた地獄に相当する。地獄は生前に悪行を重ねた人間が赴く場所だと想定されていることから、この他界もまた天国・極楽同様、因果応報の観念によって規定された死後観といえるだろう。こうした他界観の歴史は比較的古く、たとえば浄土往生の成否は現世での生き方によって定まるという考え方は、『往生要集』などを通じて平安時代にはすでにひろまっていたとされる(川村, 2015)。因果応報を実現する場としてのこうした伝統的な他界観は、現代でもなおそ

の原型をとどめているといえるだろう。

本クラスターは概して怪談話や民話、スピリチュアリズム（心霊主義）など死者一般をめぐる言説をあらわしたものである。死の人称（Jankélévitch, 1966 中澤訳 2017）、また東北被災地における霊的体験・幽霊譚に関する堀江の調査（Horie, 2016）に照らせば、大切な故人、「身近な霊」への愛情と惜別の念に特徴づけられた先のクラスターとは異質の、自分とは無関係な他者（三人称）、「未知の霊」に関する物語的性格の高い死後観といえるだろう。

### 供養の効用

以上2クラスター6因子のうち「懲罰としての他界」を除く5因子には、遺族・子孫による供養への信仰をあらわす項目がひとつずつ含まれる結果となった。つまり、遺族が供養しなければ、死者は天国・極楽に行くことができず、あるいはこの世で平穏な眠りにつくことができず、子孫に祀られるご先祖様にもなり得ず、また非業の死者となってこの世をさ迷い、生者に災いをもたらしうるといふ信仰が、人々の各死後観を構成する一要素となっていることが確認された。近年、葬儀の廃止や簡略化など仏教的慣習からの離脱が進んでいると指摘されるが、供養は死後すべての局面で不可欠であり、これを怠ると主に死者にとって好ましくない事態になりうるといふ信仰は、現代に生きる人々の死後観になお根強く残っていることがうかがわれる。

### 魂・靈魂

「魂・靈魂」は、死後も魂や意識は消えずに残る、という死後観をあらわす因子・クラスターである。他界を想定するにしろ共生あるいは生まれかわりを想定するにせよ、肉体を失った個人が死後も存続するためには魂や靈魂の存在を仮定することが不可欠である。その意味で、この因子は前掲の各因子を包括する死後観でなければならないが、クラスター分析の結果はこの前提を支持するものとなった。

## 大きな存在への統合

「大きな存在への統合」は、個々の死が、自然、宇宙、歴史、生命などの大きな存在に吸収されていくという生命観をあらわしている。本因子・クラスターは後述する「生者の記憶」とともに、存在脅威管理理論 (Solomon et al., 1991: 脇本, 2005) でいう象徴的不死に相当する。魂の永続性と勧善懲悪の死後世界、あるいは死者との共生を仮定するここまでの因子に比べると抽象度の高い死後観といえるが、死者は生者の記憶のなかにのみ生きるという信念ほど割り切ったものとはいえず、実際クラスター分析の結果からは、本因子が前出のクラスターと「生者の記憶」の中間に位置することが確認されている。

## 生者の記憶

「生者の記憶」は、死者と生前に関わった人、業績、遺品・写真など、形ある人・モノのなかに死者は生き続けるとする立場である。あるかどうか判然としない死後世界ではなく、いま確実に存在している人・モノに依拠する考え方であることから、どちらかといえば現世的な死後観と位置づけることができるだろう。これ以外の死後観は平均値がいずれも中点 (3) 付近であったのに対し、本因子の平均値は 3.80 ともっとも高い値となった。靈魂の存在や死後世界、生まれかわりを信じる人が、死者の依り代のようなモノを大切にしたり、死者が心のなかで生き続け、見守り、支えてくれると考えたりすることはあり得る。逆に靈魂の存在などを積極的に信じるわけではない人も、死者が記憶やモノに息づいていることを象徴的に解して同意することは可能である。佐藤 (2008) のいうように、この死後観は多くの現代人から受容されているようである。

## 死後観の分類

以上の因子構造を岸本 (1973) の 4 分類に統合した結果を表 5 に示す。  
②死後の生命の永続のうち (1) 靈魂に相当するのは、「魂・靈魂」「ネガ

ティブな共生」「ポジティブな共生」「ご先祖様」の4因子であり、(2)理想世界、未来国に相当するのは「褒賞／懲罰としての他界」の2因子、(3)輪廻には「生まれかわり」の1因子、さらに③限りなき生命への委託には「大きな存在への統合」と「生者の記憶」の2因子が対応すると考えられる。本稿は、これまで断片的に検討されてきた死後観を体系化するとともに、岸本（1973）の包括的な分類を精緻化し、日本人の死後観を実証的に検討するための枠組みを提示した点に意義があるといえるだろう。

表5 死後観の分類

岸本（1973）の分類		分類		
		因子	クラスター	キーワード
① 肉体的生命の永続				
② 死後の生命の永続	(1) 霊魂	魂・霊魂		肉体からの離脱、不可視性、意識
		ネガティブな共生	三人称の死	非業の死、早世、心残り、災い、未浄化の霊、供養されない死者
		ポジティブな共生	二人称の死	遍在性、この世での安らかな眠り、お盆、見守り・庇護、国家や家の守護、遺族の供養
	ご先祖様			
	(2) 理想世界 未来国	褒賞としての他界	三人称の死	天国・極楽・浄土、善行と因果応報、再会、念望成就、成長、遺族の供養
		懲罰としての他界		地獄、悪行と因果応報
	(3) 輪廻	生まれかわり	三人称の死	善行・悪行と因果応報、遺族の供養
③ 限りなき生命への委託	大きな存在への統合		自然・宇宙・大地・歴史・神、子ども・子孫	
	生者の記憶		思い出、仕事・作品、遺品・形見・写真	
④ 現実生活での永遠の生命の感得				

## 考察：性差・年代差

表4に挙げた結果から導きだされるのは以下の三点である。

第一に、三人称の死をめぐるクラスターに属する2因子（「ネガティブな共生」「生まれかわり」と「魂・靈魂」の1因子では年代差が確認された。20代、30代、40代という相対的な若年層は、50代、60代、70代以上の層に比べ、スピリチュアリズム的言説としてのこうした死後観を肯定する傾向がみいだされた。本結果は、若年層ほど「あの世」「靈魂」の存在を信じるという先行研究（ホスピス・緩和ケア研究振興財団, 2018：統計数理研究所, 2008, 2013；渡部・金児, 2004）とも一致するものである。

第二に、「大きな存在への統合」因子では、上記とは逆の傾向が確認された。すなわち、50代、60代、70代と年齢を重ねるほど、個々の死は人知を超えた大きな存在（自然・宇宙・歴史・神など）に統合されていくとの死後観が強まり、その信仰は20代、30代、40代より強いものとなった。スピリチュアリズムで説かれている、または物語として流布しているような死後観を高年層ほど否定するという先の結果も総合すると、人々の死後観は年齢を重ねるほど大局的・俯瞰的なものになっていくのかもしれない。これまで、本因子に相当する内容を単独で扱い、年代差を検討した実証研究は存在しない。ただし堀江（2015）は、既成仏教には靈魂の存在を肯定する宗派と否定する宗派があるが、どちらも死後は個人を超えた全体的な「いのち」に融け込むという生命主義的なイメージを共有していると指摘する。また堀江（2018）によれば、高年層は若年層より靈魂を信じる割合が低い、宗教的信仰を持つ割合は高いことから、靈魂は否定するが大いなる「いのち」を肯定する生命主義と組み合わせられた死生観がこの世代では優勢であるという。高年層ほど「大きな存在への統合」のような死後観を保持するという今回の結果はこのことを裏づけるものといえるだろう。

第三に、二人称の死をめぐるクラスターに属する3因子（「褒賞としての他界」「ポジティブな共生」「ご先祖様」と「生者の記憶」の1因子では有意な年代差が確認されなかった。前掲のように、近年における日本人の死後

観は「若年高・高年低」の傾向を示してきか、ここまでの結果をふまえるならば、それは物語・スピリチュアリズム的な死後言説に対する態度にみられる特徴であり、死別した死者の安らかな眠りや充足、そして死者が思い出のなかに生き続けることを願う気持ちにおいては、世代・年代による差異はないものと結論づけるのが妥当であろう。死後観がとくに死者の幸福や再会への願いを帯びたものとなる場合、その信仰強度を規定するのは生者の年齢などではなく、死者への愛情や惜別の思いの強さとなるはずである。本稿ではサンプル数の関係から回答者における重要な死別経験の有無を考慮しなかったが、今後は多数を占める死別経験者（998人、78%）に限定して分析を行い、この点を明らかにしていくことが求められる。

最後の論点は性差である。本稿で得られた9因子すべてで性差がみいだされ、女性はあらゆる類型の死後観を男性より信じていることが確認された。この結果は、「あの世」「靈魂」「崇り」「見守り」への信仰や（金見, 1993, 1994；日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団, 2018；統計数理研究所, 1958, 2008, 2013；渡部・金見, 2004）、死は幸福な新しいステージの入口とする信仰（Wong, Reker, & Gesser, 1994）において性差をみいだした先行研究の頑健性と普遍性を裏づけるものである。女性のほうがなぜ死後観を肯定するのかという問いは、これまで死の恐怖や出産可能性（金見, 1997）、女性の浄土往生が困難とされた歴史的・宗教的背景（川村, 2015）などから説明が試みられてきた。近年、性差一般についての検討は、社会・文化的な側面に加えて生物学・神経学的な観点からも行われるようになってきている。そうした多角的な知見をもって上記の問いに向きあうことのできる日もそう遠くはないだろう。

## ■註

本稿は、東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センターの特定事業費（死生学事業費）を資金として行った「一般的日本人の死生観の基礎的調査（主体：堀江宗正・白岩祐子）」のうち、死後観についてのデータを分析したものである。

## ■文献

- 朝日新聞 (2010). 死生観・本社世論調査 2010年11月4日朝刊
- 五来重 (1994). 日本人の死生観 角川書店
- 平井啓・坂口幸弘・安部幸志・森川優子・柏木哲夫 (2000). 死生観に関する研究：死生観  
尺度の構成と信頼性・妥当性の検討 死の臨床, 23, 71-76.
- 堀江宗正 (2015). 霊といのち：現代日本仏教における靈魂観と生命主義 死生学・応用倫  
理研究, 20, 195-235.
- Horie, Norichika. (2016). "Continuing Bonds in the Tōhoku Disaster Area: Locating the  
Destination of Spirits," *Journal of Religion in Japan*, 5, 199-226.
- 堀江宗正 (2018). 死後はどう語られているか：スピリチュアリズム的死生観の台頭 堀江  
宗正 (編著) 現代日本の宗教事情 国内編 I 岩波書店 pp. 147-167.
- Jankélévitch, V. (1966). *La Mort*. Paris: Flammarion. (ジャンケレヴィッチ, V. 中澤紀雄 (訳)  
(2017). 死 みすず書房)
- 鎌田東二 (2017). 日本人は死んだらどこへ行くのか PHP 研究所
- 加地伸行 (2017). 儒教とは何か 中央公論新社
- 金児曉嗣 (1993). 現代家族の孤独と死生観 社会心理学研究, 8, 159-169.
- 金児曉嗣 (1994). 大学生とその両親の死の不安と死観 人文研究・大阪市立大学文学部紀  
要, 46, 1-28.
- 金児曉嗣 (1997). 日本人の宗教性：オカゲとタタリの社会心理学 新曜社
- 川村邦光 (2015). 弔いの文化史：日本人の鎮魂の形 中公新書
- 河野由美 (2006). 看護学生の入棺体験による死観の変化：Death education の効果に関する  
準実験的研究 実験社会心理学研究, 45, 122-135.
- 岸本英夫 (1973). 死を見つめる心 講談社
- 公益財団法人日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団 (2018). ホスピス・緩和ケアにかんす  
る意識調査 2018年 <https://www.hospat.org/research-top.html> (2018年12月27日参照)
- 小此木啓吾 (2017). 対象喪失：悲しむということ 中央公論新社
- 大阪商業大学 JGSS 研究センター (2008). 日本版 General Social Surveys <JGSS-2008> [https://  
sjjda.iss.u-tokyo.ac.jp/chosa-hyo/0800c.html](https://sjjda.iss.u-tokyo.ac.jp/chosa-hyo/0800c.html) (2019年9月8日参照)
- 佐藤弘夫 (2008). 死者のゆくえ 岩田書院
- Solomon, E., Greenberg, J., & Pyszczynski, T. (1991). A Terror Management Theory of Social  
Behavior: The Psychological Functions of Self-esteem and Cultural Worldviews. In Zanna,

- M. P. (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*, Vol. 24. New York: Academic Press. pp. 93-159.
- 杉山幸子 (1993). 宗教心の多元性について：性、年齢、入信後年数による検討 社会心理学研究, 9, 13-21.
- 立川武蔵 (2017). 死後の世界：東アジア宗教の回廊をゆく ぶねうま舎
- 丹下智香子 (1999). 青年期における死に対する態度尺度の構成および妥当性・信頼性の検討 心理学研究, 70, 327-332.
- 統計数理研究所 (1958). 日本人の国民性調査 [https://www.ism.ac.jp/kokuminsei/table/data/html/ss3/3\\_5/3\\_5\\_19582.htm](https://www.ism.ac.jp/kokuminsei/table/data/html/ss3/3_5/3_5_19582.htm) (2019年9月8日参照)
- 統計数理研究所 (2008). 日本人の国民性調査 [https://www.ism.ac.jp/kokuminsei/table/data/html/ss3/3\\_5/3\\_5\\_20082.htm](https://www.ism.ac.jp/kokuminsei/table/data/html/ss3/3_5/3_5_20082.htm) (2019年9月8日参照)
- 統計数理研究所 (2013). 日本人の国民性調査 [https://www.ism.ac.jp/kokuminsei/table/data/html/ss3/3\\_5/3\\_5\\_20132.htm](https://www.ism.ac.jp/kokuminsei/table/data/html/ss3/3_5/3_5_20132.htm) (2019年9月8日参照)
- 脇本竜太郎 (2005). 存在脅威管理理論の足跡と展望：文化内差・文化間差を組み込んだ包括的な理論化に向けて 実験社会心理学研究, 44, 165-179.
- 渡部美穂子・金児暁嗣 (2004). 都市は人の心と社会を疲弊させるか？ 都市文化研究, 3, 97-117.
- Wong, P. T. P., Reker, G. T., Gesser, G. (1994). Chapter6: Death attitude profile-revised: a multidimensional measure of attitude toward death. Neimeyer, R. A. (Ed.) *Death Anxiety Handbook*. Taylor& Francis, pp. 121-148.
- 柳田国男 (1980). 先祖の話 薩摩書房
- 山本功・堀江宗正 (2016). 自殺許容に関する調査報告：一般的信頼、宗教観・死生観との関係 死生学・応用倫理研究, 21, 34-82.

(しらいわ・ゆうこ 東京大学大学院人文社会系研究科専任講師)  
(ほりえ・のりちか 東京大学大学院人文社会系研究科准教授)